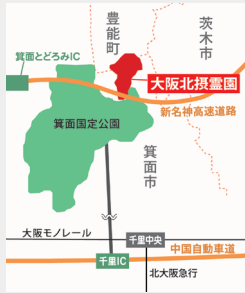


コロナで変わる葬儀・埋葬のかたち

大阪北摂霊園が「森林型」樹木葬 ヤシロは駅チカ「堂内墓地」強化

新型コロナウイルス禍で、「弔いの場」が一段と変わりつつあります。葬儀の簡素化が進む一方、お墓も先祖代々からの「家系」より、家族、個人を重視する傾向がさらに顕著に。そんな流れに対応しようと、府の外郭団体が運営している大阪北摂霊園がこの夏、全国でも珍しい「森林型」の樹木葬エリアを開設。大手の「霊園・墓石のヤシロ」(箕面市)は、都心部から歩いてお参りできる「堂内墓地」を4月に新たに大阪市北区でもオープンし、どちらも大きな関心を集めています。

<大阪北摂霊園>関西初「ドイツ型樹木葬」



総面積100ヘクタール弱。大阪北摂霊園は、箕面市、豊能町、茨木市にまたがる北摂山系南側の広大な公園墓地。純和風の「一般墓域」のほか、ゆるやかな傾斜に洋風のお墓が並ぶ「芝生墓域」、丘陵の地形を生かし、遠景まで見晴らせる「階段墓域」などさまざまな形のお墓約2万2000基が並んでいます。

その正面入り口を入ってすぐの「合葬式墓地」裏手の樹林で現在整備が進められているのが森林型樹木葬「木もれびと星の里」。新たに植樹することが多い従来の樹木葬と違い、すでに森の一部として育っている樹木を墓標にする関西初の「ドイツ型樹木葬」墓地です。



ヤマザクラなど23種類から選定

6月にオープン予定の「木もれびと星の里」の広さは約6500平方メートルで、ヤマザクラ、ヤマモミジ、コナラ、アカガシ、ケヤキなど23種類の樹木が立ち並び「混交林エリア」と、間伐をしながら森作りを行う「杉林エリア」で構成。混交林エリアでは約230本の木の中から契約者が好きな種類の木を選び、その根元の埋葬場所に遺骨を納めます。1本の樹木の周囲に最大10カ所の埋葬場所があり、1本を家族で占用できる「木だち」と、他の契約者と共用する「木もれび」の2種類。それぞれ木の種類によって価格

「木もれびと星の里」の3タイプ

<混交林エリア>

「木だち」(占用型)

好きな木の根元周りを1家族で占用。木の種類によって1本60万円～120万円

「木もれび」(共用型)

他の契約者と隣り合わせになるが、夫婦や家族で隣同士の場合指定可。1人25万円～35万円

<杉林エリア>

「天の川」(集合型)

エリア内の区画(60センチ四方)に順番に埋葬。場所の指定はできない。森全体が1つの墓になる。1人15万円～20万円

が異なります(別表参照)。樹木には埋葬者のネームプレートをかけることができ、約100年間は家族や子孫がお参りできますが、その後は本来の原生林に戻ります。



「合葬式墓地」や「30年使用+墓じまい」も

同霊園は1973(昭和48)年、主に千里ニュータウンの住民の需要に対応するため大阪府が開園。2009年までに約2万4600区画の墓所を整備し、2020年からは外郭団体の府都市整備推進センターが運営しています。現在は墓所使用者への対応と施設維持管理が主体となっていますが、2017年にお墓の建立や使用者の継承が不要な「合葬式墓地」、20年夏には使用期間30年で期間後は「墓じまい」し合葬式墓地に改葬する「北摂の小さなお墓」を販売するなど「跡継ぎがない」「無縁仏になるのが心配」といった墓地ニーズに対応してきました。

「木もれびと星の里」に着手したのは、樹木葬に対するニーズが年々高まるなかで「豊かな森の木1本1本がお墓になり、本当の意味で自然に還る墓地ができないか」(辻井正樹霊園管理課長)と検討を始めたのがきっかけ。森林の木々をそのまま墓標にし、根元の周りに遺骨を埋葬するドイツ型樹木葬の研究をしている北海道大学の山上裕文准教授の監修を受け、昨年春から全国でも珍しい森林型の樹木葬整備に着手しました。



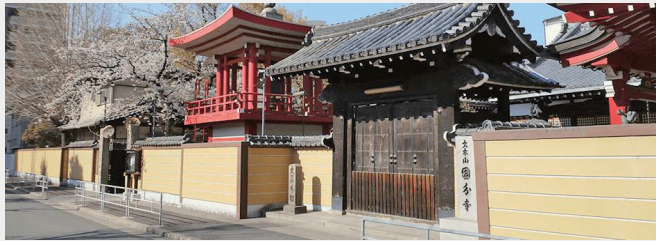
「木もれびと星の里」のイメージ(大阪北摂霊園のホームページから)

6月6日から申し込み受け付け

日本でこれまで普及している樹木葬は、霊園の空いた土地にサクラ、ハナミズキなどを植樹し、その周囲に小さめの墓碑を設けて納骨する「公園型」「庭園型」が中心。樹木ではなく、草花や芝生で彩られたガーデン風のものもあります。独身者や子供のいない夫婦が利用するケースが大半でしたが、最近では後継者のいる家庭でも「子供に負担をかけたくない」と選択する例も増えているそうです。

「木もれびと星の里」の申し込み受け付けは6月6日から19日まで。すでに多くの問い合わせがきており、樹木により申し込み多数になった場合は抽選。空きがある場合は20日以降も受け付けられます。資料請求・問い合わせは大阪北摂霊園「木もれびと星の里」(<https://jyumoku.toshiseibi.org/>)へ。

<ヤシロ>3カ所目の「堂内墓地」天六駅前にオープン



大本山国分寺(大阪市北区)

「都心に近く、気軽に何度も通えるお墓を」「田舎のお墓の手入れが重荷」—こんな要望に応え、業界大手「霊園・墓石のヤシロ」が2019年末から都心部のお寺と連携して展開しているのが「堂内墓地」プロジェクト。大阪メトロ西中島南方駅から徒歩3分の「宝蔵寺 大阪御廟」(大阪市淀川区)、阪急池田駅から徒歩6分の「寿命寺 池田龍聖御廟」(池田市)に続き、この4月に大阪メトロ天神橋筋六丁目駅から徒歩2分の「国分寺御廟」(大阪市北区)をオープンしました。

「厨子」「銘板」を自動セット



飛鳥時代の653年に創建された大本山国分寺敷地内に4月8日完成した「国分寺御廟」は、地下1階、地上4階建て。担当の方から説明を受けた後、実際にお参りを体験させていただきました。

まず1階の受付カウンターに設置されているカードリーダーに家族専用カードをかざすとデータが読み取られ＝写真上、「参拝準備中」の表示と参拝室の番号が示されます。エレベーターで地下のフロアに向かう間に、遺骨を納めた「厨子」と家名・家紋が刻まれた「銘板」＝同下＝が自動搬送装置で参拝室のお墓の1つに組み込まれ、参拝室で再びカードをかざすとお参りが可能に。お墓の前の生花は定期的に新しいものに替えられてお



り、電子香炉の上に抹香をかざして参拝。家族数人が一緒に入れるスペースがあり、右手のモニターには故人のありし日の姿など思い出の写が表示されます＝同上。フロアはすべてバリアフリーで、車イスでも楽にお参りできます。

2～4人納骨「スタンダードタイプ」100万円

「国分寺御廟」では全体で4000区画を販売する計画で、使用料(第一期特別価格)は2～4人の納骨ができるスタンダードタイプが100万円、最大6人の納骨ができるプレミアムタイプが130万円(いずれも永代供養料込み)。従来の屋外型墓地1区画のざっと半分程度で、ほかに護持費として年間1万5000円が必要です。護持費を払い続けられれば永代にわたって使用できますが、後継者がいなくなるなどで2年間にわたって護持費の払い込みや参拝がなく、連絡がとれなくなった段階でお骨は境内で永代供養(合祀)されます。

契約は宗教法人国分寺との使用契約で、ヤシロでは「当社に万が一のことがあっても大丈夫です」。同寺は真言宗ですが、他の宗派でいったん埋葬されたお骨もOK。永代供養の際は真言宗で供養されます。

大規模霊園開発は困難に

ヤシロではこれまで「北摂池田メモリアルパーク」(池田市)、「大阪生駒霊園」(四條畷市)など大阪周辺で4カ所、沖縄でも8つの霊園の開発・販売を手がけてきました。しかし、団塊の世代が還暦を迎えた



北摂池田メモリアルパークでも樹木葬に人気が集まっている(ヤシロのHPから)

2008年前後から、「祖先の供養」「お墓」に対する人々の意識が大きく変化し、先祖代々からの田舎のお墓を整理して遺骨を永代供養する「墓じまい」を検討する人も増加。これに伴い、従来のような大規模霊園の開発は難しくなり、都心部で気軽にお参りできる「堂内墓地」プロジェクトに重点を移しています。

「墓じまいのススメ」(廣済堂出版)の著書もあるヤシロの八城勝彦副社長は「新型コロナウイルスの影響もあって葬儀の場は簡略化が進んでいますが、お墓や供養のあり方も今後さらに変化していくでしょう。樹木葬は埋葬される側の気持ちを考えた理想の形といえるのではないのでしょうか」と話しておられます。資料請求・問い合わせは霊園・墓石のヤシロ「堂内墓地」(<https://www.yasiro.co.jp/form.php?pid=14>)へ。